

## 国木田治子と『台湾愛国婦人』

### — 小説「女優志願」翻刻・紹介を中心に —

下岡 友加

国木田治子（一八七九—一九六二）は、明治末から大正期にかけて執筆活動を行った作家である。その活動が短期間だったこともあり、彼女の代表作とされる長篇「破産」（『萬朝報』一九〇八（明41）年八月一日—九月三〇日）も夫・国木田独歩（一八七一—一九〇八）の経営した独歩社の具体を知るに有用な資料としての価値に重きが置かれてきた向きが強い。

しかしながら、近年調査が進みつつある愛国婦人会台湾支部の機関誌『台湾愛国婦人』（一九〇八（明41）・一〇—一九一六（大5）・三。全八八巻。ただし、現在までの発見巻は五二冊分に止まる）には、治子が少なくとも十作品を寄稿していることが確認されている。いずれも従来の治子の年譜には未掲載の作品である。そのうち、九作品については平成25年度國學院大學大学院特定課題研究報告書『『台湾愛国婦人』の研究』（研究代表者・上田正行、二〇一四・二）が翻刻を行っている。よって、本稿では唯一未翻刻であった「女優志願」（『台湾愛国婦人』第60巻 一九一三（大2）・一一）の本文を掲げるとともに、その内容紹介と治子の執筆活動についていくつかの補足を行的、今後の治子研究に資したい。

現在までに発見された『台湾愛国婦人』掲載作品、並びに小品文選者としての治子の活動は次の通りである〔1〕。

- 第37巻（二九一一（明44）・一二） 時文小品選
- 第38巻（二九一二（明45）・一） 「平和」（附録小説）
- 第41巻（二九二二（明45）・四） 小品文選
- 第42巻（二九二二（明45）・五） 「小説 町娘」
- 第48巻（二九二二（大元）・一一） 「君子蘭」
- 第52巻（二九二三（大2）・三） 「子宝」
- 第60巻（二九二三（大2）・一一） 「女優志願」
- 第66巻（二九一四（大3）・五） 「白鳩」
- 第69巻（二九一四（大3）・八） 「操」
- 第74巻（二九一五（大4）・一） 「鈴子」
- 第78巻（二九一五（大4）・五） 「故郷」
- 第82巻（二九一五（大4）・九） 「小説 母の留守」

右に加えて、「平和」が掲載された第38巻には「国木田治子女史を

訪ふ」という「在京記者」による取材文も収められている。この「在京記者」は治子の実家（榎本家）とかつて「背中合せ」の家に住んでいたため、治子や長男・寅雄とは四、五年前からの旧知の間柄だという<sup>(2)</sup>。治子には『台湾愛国婦人』に先んじて、〈内地〉の愛国婦人会機関紙『愛国婦人』への寄稿もあり（「小説 友愛」一九一〇（明治43）年三月五日<sup>(3)</sup>）、そうした実績とともに、治子の知人である当記者の存在も『台湾愛国婦人』への治子の約四年に及ぶ断続的な寄稿をうながした一因と考えられよう。原稿料が高かったと考えられる『台湾愛国婦人』は、独歩没後、家計の補助に筆を執らざるをえなかった治子にとつてはありがたい媒体だったはずである<sup>(4)</sup>。

なお、「国木田治子女史を訪ふ」という取材文中には三越勤務から帰宅した治子に「三越で原稿をお書きになる暇はありますか？」と問う記者の発言がある。ここから治子は取材時（遅くとも明治四四年末）には既に三越に勤めていた事実がうかがえる。近年の年譜では治子の三越勤務は一九一二（明治45・大元）年に開始されたとするものがあるが<sup>(5)</sup>、当時の新聞が報道する通り、一九一一（明治44）年九月二四日から勤務が開始されたとするのが矛盾がなく、より正確な履歴と考えられよう<sup>(6)</sup>。

また、従来年譜では『黄金の林』再版（大阪屋、一九一六（大5）・二）後、治子に小説発表はないものとされているが、一九一七（大6）年六月『女の世界』に治子の「小説 野菊」が掲載されていることを稿者は確認した。その他にも管見に入った治子の年譜漏れ作品として「豆の葉」（『姉妹』一九〇九（明治42）・六）、「菊の花」（『趣味』一九〇九（明治42）・一一）、「お父様の指輪」（『婦人くらぶ』

一九一三（大2）・三）、「蟹」（『読売新聞』一九一一（明治44）年七月九日付朝刊）、「裏面」（『中央公論』一九一三（大2）・七）、「小説 野菊」（『婦人評論』一九一三（大2）・一二）。同タイトルの『女の世界』（一九一七（大6）・六）掲載小説とは異なる内容）、「白犬」（ただし、署名は国木田春子となっている。『少女の友』一九一四（大3）・一）がある。雑記としては「赤坂の女」（『婦人くらぶ』一九一三（大2）・三）、「鈴虫」（『中央公論』一九一一（明治44）・九）、「未亡人生活」（『中央公論』一九一三（大2）・一）、「夏に於ける女の生活振り 三越の女店員」（『女の世界』一九一五（大4）・八）、「案内所の帳場から」（『新演芸』一九二二（大10）・四）があり、治子の著作については未だ多くの漏れがあると考えられ、今後も引き続き調査が必要である。

『台湾愛国婦人』掲載の治子の作品を通読した上田正行は「国木田治子が押しなべて力作揃いであつたのは意外であつた」「独歩死後にその本領を発揮する活躍の場があつたのである」<sup>(7)</sup>と治子の作品を高く評価しており、稿者もこれに同意する。特に『台湾愛国婦人』掲載作品中でも比較的分量のある小説「操」、「故郷」は、前者はその劇的な構成から、後者は人物の行き届いた心理の描写からそれぞれ読ませるものがあり、これらの作品を含めた上で治子の力量をはかれば、塩田良平が述べる「佳品と称せられるものは、長篇的なものよりも短篇に多く、それも小品文的なものに限るやうである」<sup>(8)</sup>といった評価は再検討を要することになる。「故郷」では汽車中の士官の無様な様子に対して「彼でも国家の干城か」といった女性主人公・安子の心意も記されており、「国家の干城たる軍人」が悪いのか、母

と妹が悪いのか」といった軍人批判の見られる独歩の『酒中日記』(『文芸界』一九〇二(明35)・一一)の一節を想起させる。愛国婦人会という、戦死者の遺族や傷痍軍人の救護・慰問を目的とする団体の機関誌掲載小説としては逸脱した記述でもある(9)。その他にも、「白鳩」は鳩の「私」語りというやや特異な方法に基づいて成功した佳品であり、「鈴子」は父を喪い理不尽な扱いを受ける母娘が、それでも他者を怨まず前向きに生きる姿勢が印象的な作品である。治子の作品の特徴として指摘される「感傷的ではないが、適度なヒューマニズムをとらない、作品世界に溺れることのないバランス感覚にさええられた透徹した観察者の眼」(中島礼子(10))はこれらの『台湾愛国婦人』掲載作品にも通底している。

本稿が翻刻した「女優志願」の構成は大きく二つに分かれる。前半は「薄情者」の許嫁の男性に裏切られ、傷付けられた若い女性・竹子の心境が、その姉・松子との対話を通じて描かれる。後半は自身の心の空隙を慰めるべく女優を志願した竹子の日常と、その危うい様子がある姉の視点から相対化されつつ描かれる。最終的には有楽座の女優である姉を持つ仕立屋の娘から、女優を持つ家族の悲惨な実態が語られることにより、竹子は心配していた家族の願いを聞き入れ、女優志願を断念するに至るといった内容である。

作品全体の出来映えとしては、先に触れた他の『台湾愛国婦人』掲載作品には劣り、凡庸である。姉・松子が口にする「詰り意志が弱いから。女優にでも成つて。華麗な生活に。心の苦痛を紛らせやうと為るのでしやうが。女優なんかに成つたら。又新しい苦痛を増すやうなものよ」といった戒めは、妹の真情を鋭くついた言ではあるが、自身

の夫に妹の新たな嫁ぎ先を探してもらうなど、彼女の価値観はあくまでも良妻賢母の規範のなかにある。その上、女優を目指していたはずの妹・竹子自身が作品末尾であっけなく翻意するため、小説としての面白みには欠けていよう。

ただし、作品が発表された大正初期の言説を鑑みれば、帝国女優養成所が設立された一九〇八(明41)年九月以後、女優が女性の新しい生き方として耳目を集める重要なトピックであったことは言うまでもない。「女優志願」の内容は、同時代読者にとって今日の我々の想像をはるかに超えて切実な、身近な問題として読まれた可能性がある。たとえば、当時の『読売新聞』の「身の上相談」には「女優になりたい(すい子)」(一九一四(大3)年七月一七日付朝刊)、「思ひ切つて女優になり何年か後は母の世話をしたい(賤女)」(一九一四(大3)年一月七日付朝刊)、「女優になりたいと決心(光子)」(一九一八(大7)年七月三一日付朝刊)、「女優になりたくて仕方ありません(悶へつゝある女)」(一九一九(大8)年八月三日)といった、竹子同様の〈女優志願〉の声が繰り返して発せられているのである。一方、これら女性の声をとりあげた『読売新聞』の「記者」の返答は「現在の日本の女優は精神上にも経済上にもいかにも苦しい生活を送つてゐると想ひます(…)同じ独立した生活をなさるなら、もつと実着な職業を選びなさいまし」(一九一四(大3)年七月七日付朝刊)と一貫して女優志願を断念することを勧める言に終始している。その他にも「職業としての女優」が、如何に悲惨にして不幸であるか。世の若い娘達は、大切な此の問題を忘れて居る」(天民生「新女優(八)」『東京朝日新聞』一九二二(明44)年一月一二日

付朝刊)、「決して軽々しく女優たらむと志すべきものではない」(翠浪生「女優論(女優志願者のために)」『女優鑑』演芸画報社、一九一二(大元)・一一、一六一頁)といった同時代の危惧の声が見られ、これらと治子の「女優志願」の体現するメッセージは通じている(11)。

しかし、皮肉なことはこの〈女優志願〉の声は治子の身内からも発せられることになる。「女優志願の独歩の長女」母親の反対でどうやら決心が鈍つた」との記事が『東京朝日新聞』(一九一六年(大5)年五月二一日付朝刊)に掲載されているのである。これまでの独歩・治子研究においては取り上げられていない資料のため、やや長いが記事全文を掲げる。

文壇の一偉星国木田独歩氏が湘南の空の一角に消えて隕てから今年でもう九年になる、治子夫人の繊弱い手に託された遺孤は其当時八歳を首に乳呑迄四人であつた、不治といふ衝動を心臓に感じて以来の独歩氏は随分気難かしい事を言つて夫人を悩ましたとは言ふものゝ、自分が箸をつけた食物には厳かに夫人の触れる事を禁じた氏の胸中は潜かに夫人の健康を気づかつたのであらう、別けても四人の遺愛の為に夫人の自重を希つた、長女の貞子が十七歳、父君の天才肌を其儘に生き々と生ひ立つた、次女のみとり子が十三歳、其間の令息は今中学にあつて父親がなくなるとも立派に成人した子達はおのの望む道へ志ざす年齢になつて貞子さんは去年から東儀鉄笛氏の門に入つた。平たく言へばまだ年齒の行かない本人の望みといふよりは勝気な此人に天才の閃きを見た傍の人々の勧めからで、母君は無論反対であつた、「お

母さんとは時代が違ふし墮落さへしないで立派にやり遂げればいゝでせう」と世の中を知らない貞子さんは言つたが、治子夫人は「どうか裁縫でも習つてお嫁に行つて貰ひ度いのです、段々世間を知つてから嫁かうと思つても一度さうした道に入つては縁が遠くなりますから今の中思ひ返してやめてくれるといゝと願つて居ます、踊りの素養があるではなし本氣に其道に入るには却々大変です、当人も此頃では止め度いと言ひ出しましたから多分やめませう、マクベスに出るなどは嘘です、学問をさせるといゝのですが夫れも思ふ様になりませんので……」と語る人の苦勞の跡が痛ましい(傍線は引用者に拠る)

引用最終傍線部「マクベスに出るなどは嘘です」とあるのは、右に先んじて報じられた、独歩と治子の長女・貞子が「愈近々有楽座のマクベス劇に初舞台としてこの天才を發揮する事となりました」(●5)年五月一三日付朝刊)という記事を受けた発言と考えられる。小説「女優志願」の発表から三年後、治子自身の娘が女優を目指すという事態は、女優が当時の女性にとつていかに魅力的で、かつ身近な職業選択の一つであつたかを如実に示している。ただ、右引用傍線部に記されたような治子の願ひは「女優志願」の姉・松子の思いとほぼ同様のものであつて、やはり女優への志願を是とはしないものであつた。その後、「最近に至り貞子さんは東儀氏の家を辞し実家に帰つて、昨日までの踊りの手振りも忘れたやうに家事手伝ひをする」(●可惜芸術の芽の枯れ)『読売新聞』一九一六(大5)年六月二一日付朝

刊)と後日談が報じられた通り、貞子が女優になったという記録は見あたらず、病弱であつたらしい彼女は一九二〇(大9)年五月二十八日、わずか二一歳(数え年)にて逝去した<sup>(12)</sup>。

明治末から大正に至る治子の作家活動期には、自ら女優として舞台に立った経験を持つ作家・田村俊子(一八八四—一九四五)が活躍している。俊子には女優の卵である三輪を主要人物として配した『あきらめ』(『大阪朝日新聞』一九一一(明44)年一月一日〜三月二日)を端緒に、女優を志す当事者の視点からその心持ちをつまびらかにした小説『嘲弄』(『中央公論』一九一二(大元)・一一)や『女優』(『女学世界』一九一六(大5)・八)等がある。これら俊子の作品に比せば、治子の『女優志願』はいかにも他者から見た表面的な女優理解とも言えよう。しかし、竹子が女優を志願する動機、その発端が許嫁であつた男性に手酷く裏切られたことにあるという設定を小説がわざわざ行つていふことには留意しておく必要があるだろう。結婚に望みを失つた女性が当時の家父長制社会において選択できる自活の方策は甚だ限られていたのであり、竹子をして女優というリスクの高い職業選択へと走らせているのは、男性の背信と男性優位の社会構造に他ならないことを『女優志願』は示しているのである。さらに言えば、仕立屋の娘が語るのには、姉が女優となつたことで当人のみならず、その妹と母親という、またはや女性が犠牲となる姿、構造であつた。竹子が女優志願をあきらめることで閉じられる小説の結末は、先にも触れた通り、小説的事件を未然に防いでいかにも凡庸な印象を与えるが、そこにこそ書き手である治子の女性読者に向けた切なる思い、すなわち女性に軽々に自身の人生と家族を犠牲にはしてほしくな

いという願いが込められているとも言えよう。

なお、『女優志願』の主要登場人物である「松子」「竹子」の名前は、一九一〇(明43)年に東京進出し、一九一二(大元)年九月には大阪に女優養成所を設けた松竹合名会社(一九一一(明44)年より松竹合名社と社名簡略化<sup>(13)</sup>)から取られたものと考えられる。また作中前半、姉妹が帝劇で文芸協会の「シーザー」を観劇していることから、史実に照らせば小説の時間は一九一三(大2)年六月二六日〜七月二日に設定されていることになる。この帝国劇場での上演「ジュリアスシーザー」(シェイクスピア作・坪内逍遙訳・松居松葉監督<sup>(14)</sup>)は、治子の長篇『小夜千鳥』(一九一四(大3)・三、岡村書店)においても、「此の間帝劇でシーザーって云ふのを演た時毎晩出たので、僕も一度連て行つて貰つたけれど、面白かつたですよ」(四七頁)と言及されており、実際に当劇を治子自身が観劇した可能性は高い。「女優志願」本文翻刻にあつては、漢字は新字体に統一し、ルビはパラルビとし、明らかな誤植は訂正したことを断つておく。

#### 【翻刻】女優志願

国木田治子

松子は妹の竹子の部屋の通り掛りに這入つて視ると。外国切手の張つてある。手紙を四辺に取散らかしたなかで。竹子は俯向して泣いて居た。

それを視た松子は。妹の心中を察すると。抱き合つて。共に泣いて遣り度い心地がしたが。やつと心を取り直して。

『竹ちゃん。如何したの』

と。何気無く竹子の傍へ寄つて。肩に手を掛けて。引起相とした。すると。猶体を堅く仕ながら。

『姉さん。御性だから。彼方へ行つてゝ頂戴』

と、松子の体を突き除けようとした。

『何故其様事を言ふの。亦為雄さんの事を思ひ出したのね。おやめなさいつたら。如何なに今更思つたつて。致方が無いぢや無いの。彼んな薄情な人の事なんか』

『何んでも可いぢやありませんか。私は一人で居たいのだから。彼所へ行つてよ』

と。竹子の言ふのを聞いた松子は。困つた事だと言ふやうな顔をして。暫時凝と竹子を見詰て居たが。

『こんな物が有るから。猶いけないのよ』

と言ひながら。散らかつて居る手紙を拾ひ集めながら。

『私が預つて置ませう』

と言つたので。つと顔をあげた竹子は

『厭よ。誰が姉さんのやうな。同情の無い人なんか』

と姉の手から手紙を奪はうとした。

『まア』

と其の陰幕に呆れた松子は。

『同情が無いなんて。ひどいわ。竹ちゃんの身を思ふからこそ。さう言ふのよ。それに』

『偽々。先日も義兄さんと。竹ちゃん馬鹿だ。彼んな奴を何時までも。思つて居るなんて。言つてたじや無いの』

『それは義兄さんが言つたので。私が言つたのぢやないわ。』

『だつて。言つたも同じ事だわ。義兄さんは姉様のハスさんですもの。妹がそれはく辛い情ない身に成つたのを。可愛相だとも思つちやくださらないで。馬鹿だなんて——如何せ私は馬鹿よ。それだから。為雄さんに捨てられたのだわ。父様も母様も姉さんまで。矢駄良に。諦らめろく〜と被仰つたつて。さうは行きません。体はかうして生きて居たつて。心は既う死で居るのですよ。蟬の抜殻みたやうなものです。いまに。雨や風に晒されて。こな〜に潰れて了ふのですわ。早くそう成りたい。今日からでも。今からでも』

と物狂はし相に。眼を据ゑて言ふので。松子は持て余して了つた。

途方に暮れて居る松子を視た竹子は

『姉さん。最早私の事なんぞ。心配してくださらないでも可いのですよ。私は独り者だから。独りで泣いたり笑つたり。喜んだり。悲んだり仕て暮すから。姉さんは義兄さんにハンカチーフの汚れたのを。持たせて叱られない用心でも成さるが可いわ』

と皮肉を言つた。それを聞いた松子は腹も立てず。返つて情けの籠つた眼で妹を見ながら。

『竹ちゃん。無理かも知れないが。自暴な心なんて起さずに頂戴よ。』

たつた二人の姉妹では有りませんか。今だつて此室へ来た時一所に泣いてあげやうとさへ。思つたけれど。それでは返つて貴女の悲しさを増すばかりだと思つたので。私だつて悲しいのを。やつと堪へ居たのに。そんな水臭い。皮肉なんぞ言ふものでは無いわ。父さんだつて母さんだつて。如何なに竹ちゃんの事を心配して居らつしやるか。早く為雄さんなんかより。もつともつと立派な方へ縁附度いと。探して居らつしやるのよ。それで敬一さんも今朝から。御友達の外へ行つたの

よ。』

と優しく言つたのを。興奮のぼせて居る竹子の耳には当附けらしく聞こえたので。

『折角の日曜日だと言ふのに済みませんねえ。そんな事と知つて居たら。御とめするのだつたに。真箇ほんとに私の事なら。御心配には及びません。と何卒皆様に被仰つて頂戴……』

と。けんもほろろに。言ふので。松子は情無さに。思はず涙を浮べながら。

『何故そんな事を竹ちやんは言ふの。思ひ違ひを仕ては困つてよ。』

と。沁々言つたので。竹子は流石に気の毒に成つた。

『竹ちやんは。為雄さんの態度を恨む心より。恋しいと思ふ心の方が深いので。苦しむのでしやうが。男なんて。それは手前勝手な薄情な者なのよ。竹ちやんは何と思ふか知れないけれど。為雄さんだつて。その薄情者の一人よ。何故と言つて御覧なさい。さんざ父さんの世話に成つて。外国へ行つたのだつて。誰のお蔭でしやう。竹ちやんから。父さんに願つて。遣つて戴いたのでしやう。それに恩も義理も忘れて了つて。自由のきく身に成つたら。行方知れずに成つたやうに。見せかけて。自家との縁を断つて。了つたのですものね。』

『姉さん既う言はずに頂戴。真箇に私が馬鹿だつたのよ。彼んな薄情人人とも知らず。父さんに御迷惑を掛たのですが。思ふと情なくつて致方が有りません。既う真箇に諦らめますわ。皆さんにも御心配を掛て——』

と竹子の心も段々静まつて来たので。前の暴言を悔むやうに。優しく言つた。

『真箇に諦めて頂戴ね。彼んな恩も義理も知らない人の行末は。きつと可い事は無いわ』

と松子も慰さめるやうに言ふのを聞くと。憎いながらも為雄の上が思はれて。竹子は身も世も有らぬ感おぼひがした。

為雄と言ふのは。松子達の父親の友人の子なのだが。早く父母に別れたので。情深い松子の父親は。為雄を十二歳の時から。自家へ引取つて世話をした。処が為雄は生れつき伶俐なので。小学校から。中学。高等商業を卒業するまで。優等の成績で押通したので。父親は世話甲斐の有つたのを喜ぶと共に。将来は妹娘の竹子と。配めあ合つて。楽みに仕て居るうち。高商を卒業た為雄は留學したいと。言ひ出したので。

それも心可く免して。出来ないなかを無理に都合して。英国へ遣つたのだが。遠く離れて居るうちに。為雄の心は如何變つたのか。友達に頼で。行先不明との知らせをよこして。それぎり音信不通に成つて了つた。そんな事とは知らぬ此方では。手の届く限り。行先を探したが。如何しても知れなかつたので。父親の失望は見るも気の毒な位。未だ其上に為雄を。焦れ焦れて居た竹子は。余りの悲みに。病氣に成つて。一時は到底助らぬものと。傍の者も諦めて居たが。仕合と命だけは取上げたが。此世に何の望も無い身を。尼に仕て呉と言つて。親達を困らせた。それも皆なの慰さめで。漸々思ひ止まつたが。味気無い月日を送るのが。竹子は沁々辛かつた。それが此頃人づてに。為雄が立派な紳士に成つて。嫁を探しに日本へ帰つて居ると聞いたので。竹子は胸を毒矢で。射抜かれたやうな苦痛を感じた。

『死んで了ひたい』と幾度思つたか知れないが。親や姉の後の悲みを思うて。流石にそんな事も出来ないの。心ならずも生ては居るが。

世間の人に顔を見られるのも。恥かしいやうな感がして。自分の室からさへ。出るのを厭がつて。泣いてばかり暮して居るので。子に甘い父親は。恨みを捨て為雄と竹子との結婚を頼むで視やうか。と迄言つたが。それは竹子が承知仕なかつた。為雄を仮令如何なに恋しく思つて居ても。一度捨られた身を如何してそんな恥かしい事が頼めやう。既う彼んな薄情な人の事は諦めて了ひました。と竹子は立派に言つたが。恋ひしさと。恨めしさに心は乱れて。人知らず一日も早く此世から遁れることが出来るやうにと。祈つた。

『竹ちやん。貴女家にばかり居て。くよ／＼して居ちや駄目よ。少し何処かへ遊びに行かうじやないの。外へ出れば知らず／＼心の慰みにも成る事がきつと有るわ。今から行きまじやうよ。竹ちやんの好きな百花園へ？』

『難有たう。けれど外へ出て。お友達にでも逢ふと恥かしいわ』

『何んの恥かしいことが有るのですか。竹ちやんが。世間へ顔向けの出来ない事でも仕たのじや無し。敬一さんも今日は一日留守だから。二人で行きまじやうよ』

と松子が一生懸命に進めるので。竹子も外へ出てみる氣に成つたが。百花園は思ひ出の多い処なので。行くのが恐ろしいやうな氣がした。

『姉さん帝劇は何んでしやうね』

『芝居へ行くの』

と。呆れたやうな妹を視た松子は。

『彼んな処こそ。お友達が沢山行つて居るわ』

『さうね。でも私悲しい／＼芝居でも観て。さめさめ泣いたら。心が

晴やうかとも思ふの』

『竹ちやんがさう思ふなら。それも可いでしやう。私は何処へでも行くわ。帝劇は今文芸協会のシイザーなのよ』

『猶可いわ。行きまじやう。義兄さんと三人でね。今夜！』と微笑した。

『え／＼』と松子も妹の笑顔を嬉し相に眺めたが。

『二人ざりが可いことよ。敬一さんと行くとおとなしく仕て居ないと。叱られるのですもの。』

と小供らしく言ふ松子の顔を。竹子は羨まし相に眺めた。

× × × × ×

出入口の群衆のなかを。松子の手に縫りながら。漸と遁れ出た竹子は。夢心地に地を踏みながら。可く晴て。星の青い空を視あげた。其の前を自働車が駆け脱けたので。視るとも無しに。車中の人に眼を馳ると。先刻東洋軒で。竹子の踊の師匠だつた婦人と。一所に。アイスクリームを飲むで居た。帝劇の女優の一人だつた。其の女優は。師匠が竹子に。女優に成れと進めた時。一所に成つてそれを賛成して。親しく色々の話を仕て呉たのであつた。昼間のやうな。ア、クトーの燈火に。車中からも。竹子の居るのが見えたのか。笑顔で会釈したが。未だ其の笑みの消えぬ間に。自働車は。暗の大路を飛ぶやうに。去つて了つた。

『嫌な臭氣——だから自働車厭ひだわ』

と鼻を蔽ふ松子の態度も。茫然と自働車の後を見送る竹子の眼には入らなかつた。

『何を茫然と仕て居るの。さあ行きまじやう。遅く成るわ』



と言はれて。始て我に返つた竹子は。

『女優が可いわ。真箇に——』

と独言を言つたので。竹子の心中を知らぬ松子は。

『女優が如何したの』

と聞き返したので。竹子は。

『姉さん。私女優に成つても可いでしやう』

と甘えるやうに言つた。松子は呆れて立止まつた。其の姉の顔を笑止と眺ながら。竹子は。

『私は最早一生涯独身で。華麗な女優生活でもして。暮しましやうよ。踊だつて三味線だつて。現今の女優達には敗ない積よ。帰宅たら。父様に願つて見るから。姉さんも傍から。執成して頂戴ね』

と熱心に言つたので。困つた事を思附いたものだ。心秘かに当惑した。

『今夜のブルータスの夫人だつて。彼れがもつと上手なら。如何なにかかつたか知れないわね』

『然うね』

と気乗のせぬ姉の返事にもとんちやく無く。

『私は新しい劇も好きだけれど。仍且旧劇の方が可ね。役者に成るには。義太夫も出来なきや駄目ね』

などゝ夢中に成つて居る竹子を。松子はようよう電車へ乗せて。帰宅て来た。

其晩。竹子は夕方渋々出て行つたのに引變へて。元気に新劇の話などして。はしやいで居るのを視た両親は。却つてそれを可愛相に思つた。

日が過つに従つて。竹子が女優に成ると。言ふ決心は愈々堅く。ゆるさねば。絶望のあまりひよんな事でも仕出かしてはと。子に甘い親心から。兎も角もゆるしは仕たが。一二年芸を励むだ上での事だ。竹子は毎日女中を連ては。諸芸の稽古に歩いた。

\* \* \* \* \*

今日は親類に仏事が有るので。両親が留守なので。竹子は稽古を休むで自家に居た。

松子は昨夜の暴風で花壇がめちやく／＼に成つたのを。既に成つて修繕して居た。所へ竹子が前髪を。中央から別けた束髪に結つて庭へ出て来た。それを視た松子は。

『まア』

と一度は愕いたが、一増艶な妹の姿に見惚れずには居られなかつた。

『姉さん如何したの』

と姉の呆たやうな顔を視ると。竹子は微笑した。

『だつて余り艶麗なのですもの』

『厭な姉さん。おごらせやうと思つて』

『何んでそんな人の悪いことを思ふものですか』

と言つて松子は。

『竹ちゃん。御性だから袂からハンカチーフを出して。顔の汗を拭いてね。此の通りだから』

と土だらけな手を視せた。

『まア。何んと言ふ手でしやう。お止しなさいよ土弄りは。顔だつて日光に焼けて。随分黒く成つてよ。』

と眉を寄せながら。松子の汗ばんだ顔を拭いて遣つた。

『難有たう。』

と礼を言つた松子は。倒れたダリヤを起して。

『可愛相に』

と独言を言ひながら。竹で支えて遣るのを見た竹子は思はず。吹き出して。

『厭に成つちまうわね——。御隠居さんのする事よ。花造りなんて。』

と雑返した。

『黙つておいでよ。花を作る楽みなんて。貴女にはわからないのだから。』

と笑ひながら。さつさと働いて居るので。竹子も暫時眺めて居たが。

松子が其れから其れと。夢中に成つて。庭中片付けかねぬ有様を見た。

竹子は堪兼て。

『姉さん。御昼飯のお菜は如何するのよ。福が困つて居たわ。私もそろ／＼お腹が空いて来たわ。此儘に仕て置くのが。氣持が悪ければ植

木屋の老爺を頼めば可いじゃないの。』

と止めたが。

『詰らないわ。老爺なんか頼むのは。お菜なんて。有り合せて沢山よ。』  
と松子は平気で居るので。

『花の事だと全々狂人だから困つちまうわ。折角真黒に成つて。丹精したつて。一ツ風が吹けば。こんなに成つて了うのですもの。そんなに花が好きなら。鉢植のを買つて眺めれば可いのに。第一此の暑氣のに。日和へ出て居るのですもの。病気に成るわ。花と体と何つちが大切でしやう。』

とくど／＼言つて居た竹子は。懸て。思ひ出したやうに。

『歌舞伎の連中には。姉さんも行つてくださるでしやうね』

と聞いた。

『亦た義理見物なの。厭よ私は既う／＼連中なんかと。芝居へは行かないわ。先度で懲々仕た。粗末に取り扱はれた上に。御金を沢山取られるのですもの。詰らないわ』

『心細いことを言ふのね。私だつて将来に皆さんに。如何なお世話に成るか知れないから。義理はちやんと仕て置きたいの』

と表面ばかり華麗な女優生活を夢見て居る竹子は。今から其時の用意にと。少なからぬ金銭を此頃遣ふので。それを苦々しい事に思つて居る松子は。如何かして。今の中に女優志願を思ひ止まらせやうと。

『義理なんてことは切の無い事だから。お止なさいよ。今からそんなに手を上げたら。将来に如何するの。父様だつて。さう／＼お金が続くものですか。女優なんて三面記事の材料にばかり成つて居るじや無いの。』

と松子は手をバケツの水で洗つて。竹子と縁へ並んで腰を掛た。

『私はそんな材料にされるやうな事は仕ないわ。』

『然うは行かないわ。貴女は何程立派な心を持つて居たつて。境遇が而うさせて了うのだから。』

『私はそんな意志の弱い女じや無い積りよ』

『駄目よ。詰り意志が弱いから。女優にでも成つて。華麗な生活に。心の苦痛を紛らせやうと為るのでしやうが。女優なんかに成つたら。又新しい苦痛を増すやうなものよ。止めて頂戴。敬一さんだつて。貴女が女優に成る事を如何なに辛がつて居るか知れないわ。』

『然うでしやうともね——。さぞ跳つ返りな女と蔑視さげすむで居らつしやるでしやう。とんだ妹を持つて姉様も御氣の毒ね。私が女優に成るこ  
とが。皆様の御迷惑に成るやうなら。籍を抜いて戴いて。御師匠さん  
の媳むすめにでも仕て貰はうわ』

『何故そんな事を言ふの。みんな貴女の将来を思ふから。心配するの  
だわ』

『御親切は嬉しいけれど。安心して居て頂戴。皆さんの恥に成るやう  
な事は誓つてしませんから。』

と竹子が燃るやうな感情を眼に言はせて。熱心に言ふので。松子も  
流石に。さうく頭かぶごなしにも出来ないので。黙つて了つた。

其処へ女中のお福が周章しゅうしやうて、駆け込むで来たので。如何したのか  
と。姉妹は後を見返ると。

『来ましたく』

と小声で言つたので。何にが来たのだから判らないので。姉妹は呆れ  
てお福を視ながら。

『何にが来たの』

と聞き返すと。

『彼の仕立屋の娘さんですよ』

と言つた。それを聞いた竹子は。

『姉さん。先日お話した有楽座の女優の妹よ』と物々しく言ふので。

『あゝ然うなの』

と故意と無情なく言つて。取合ずに居ると。

『竹子様。お逢に成りますなら。あげましやうか。待たせて有るので  
ございませす』

とお福が促したので。

『あげてお呉よ。姉さん其の娘に逢ても可いでしやう』

と姉にゆるしを求めた。

『逢つて如何するの』

『如何するつて事も無いけれど。参考の為に女優つて者の。不素ふだんの有  
様を聞いて見るのよ』

『然うね——』

と難かしい顔を仕て居たが。

『まア逢つて視ると可いわ。けれど如何な娘だか。知れも仕ないのに。  
余り親しく成つて了ふては困つてよ』

とそれでも渋々ゆるしたので。竹子とお福は台所へ出て行つて。辞  
退する娘を。無理遣りに。茶の室に連れて来た。

松子も許は仕たものゝ。心に掛るので。自分も其処へ来て視ると。

娘と言ふのは十八九歳位で。容貌も十人並優れ居るが。日光に焼て真  
黒なのと。衣服を少しも取り繕はぬので。二十歳以上に見える。

娘は捕れた小鳥のやうに。室の隅にちいさく成つて坐つて居た。這  
入つて来た松子を視ると。

『毎度。御仕立物を有難たう存じます』と丁寧に挨拶した。

其の世馴ぬ娘の態度を見た松子は。少しは心を安めるのであつた。

遠慮の無い竹子は。

『貴方の姉さんは女優で在らつしやるのですつてねー』

と言つたので。松子は妹の無遠慮を気の毒に思つて。竹子に斯様言  
はれて。顔を赤めながら。差俯向いて居る娘に。

『御仕立物は。貴女が為さる相ですが。御上手ですことね。先日も他

所で讚られたのですよ』

と慰め顔に言ふのを聞いた娘は。流石に嬉し相な笑顔を見せたが。  
『如何致しまして。さぞ御氣持が悪うございませう。』

と謙遜した。

『姉さんは。何んと被仰るの』

と竹子は亦しても。聞くので有つた。

『姉でございませうか』

と暫時言ひ淀んだ娘は。

『月の井清枝と言ふのでございます』

と耻かし相に言つた。

『まア。それでは有名な女優ではありませんか。それなのに。何故貴女は賃仕事なぞして居るの。姉さんと一緒に女優に成れば可いのに』

『ハイ』

と迷惑相に答へた娘は。

『御召が出来ましたから。御覽遊ばして』

と派手な御召縮緬の単衣を包みから出した。

『難有たう。』

と竹子はそれを片寄せながら。

『貴女のお名は何んと被仰るの』

『小夜と申します』

『月ノ井小夜子。可い御名ねー。真箇に何故女優にお成り為さらなの。其の御美貌で惜いわねー』

『私は女優なんて。大嫌ひでございませうもの』

『まア。如何して厭なのでしょうね。姉さんが。成つて在らつしやる

から。丁度可いじや有りませんか。』

『真箇でございませうね。御当家のお嬢様も将来に女優にお成り遊ばすのですよ』

と口の軽いお福が傍から斯様言つたので。お小夜は呆氣に取られて。竹子を見たが。

『失礼でございませうが。如何言ふ事情でそんな事を思立ちにお成り遊ばしたか存じませんが。女優なんて。それは〜厭な者でございませうよ』

さも〜厭相に言ふので。  
竹子は面白からぬ顔をした。

『耻をお話するやうでございませうが。姉は心得違ひから。彼んな者に成りましたお蔭で。母親も私も思ひも掛ぬ。苦勞を為るのでございませう。お嬢様。生意気な事を言ふと。御思召まじやうが。それはおやめ遊ばした方が。可ろしうございませうよ。私の家も父は早く亡なりましたが。親子三人が遊んで居ても。如何やらかうやら。一生涯艱らぬ程の遺産が有つたのでございませうが。姉が彼の表面だけ華美な。女優と言ふ者に。憧れて。随分母親や私も苦い意見を申したのですが。如何しても承知ませんで。女優に成つて了ひましたが。私達が思つた通り。姉は墮落して了ひますし。遺産も無く成り。とう〜他人様のお情で暮すやうに成つて了ひました。』

とお小夜は思はず涙組むだ。

『難有たう。可く言つて下さいました。私も妹を如何か。そんな者に致たく無いと。停めるのですが。矢張り如何しても承知くれませう。貴女の姉さんだつて始から。そんな取り返しに附かぬ御身に成らうと

は思つちや。居らつしやらないでしたらうに』

『而うでございますとも。姉も始は他の女優の爲ることを。大變賤しむで居りましたが。終ひには仍<sup>や</sup>且り駄目<sup>ば</sup>でございました。母親や私の苦勞を親類でも。氣の毒とは思つて呉ますが。姉さんの眼が覺めて。女優を停めて了はなければ構つて遣らぬと申します。私は如何な苦勞も厭ひませんが。年寄つた母親には実に氣の毒でございます。私も此頃姉を随分。責るのですが。将来に樂に仕てあげるとばかりで。余まり何にか申しますと。自棄に成つて。強いお酒を飲んで愈々私達を困らせるものですから。母親が返つて私を和めると言ふやうな訳で。家庭も遂々めちや／＼に成つて了ひました』

とお小夜は段々沈んで来る。

『お可愛相にねえ。女優々々と世間で偉相に騒ぎ立てたつて。賤しい昔の女優者と変りは無いのですもの』

『真箇に而うでございませとも。新聞に出される度に。名が拡がると敗惜みは言つて居りますが。其れが爲に愈々心が荒んで行くのが。可く見えるので情無く成ります』

との。姉とお小夜の話しを凝と聞いて居た竹子は。

『それでは。如何なに自分ばかり立派な心を持つて居ても。それでは通らないのでしやうかね』

と情なさ相に言つた。

『通らない事は有りますまい。けれど周囲の誘惑や。迫害に。打勝つて行かうと言ふのは。とてもとても女の弱い心では。私はむづかしいと思ひます。それに貴女には一方の煩悶も有るし。真箇に思ひ停まつて頂戴い。お小夜さんの姉さんが。可いお手本です。』

『真箇に而うですな。それじや私も可く考へますわ』

と悄悄と竹子は立つて自分の室へ行つて了つた。其後姿を哀れに見送つた松子は。

『お小夜さん。真箇に有難う御座いました。妹も多分思ひ停つて呉ましやう。』

『如何か而うしたいものでございませ。姉なども可い役一ツ附けて貰ふにも。如何なに苦勞を致しますか知れません。如何なに芸が可く出来ましても。そればかりでは通りませんで。下手でも人氣の有る人が自然可い役が附くのでございませ。又其の人氣といふのが大變でお金も入ますが。連中を頼むとか。最眞の方を沢山こしらへて。応援して貰ふとか。その苦勞でも体が眼に見えるやうに。瘦て行くのでございませ。』

『さぞ他人の知らぬ苦勞を為さるでしやうね。』

『独りで泣いて居る時もございました。けれど未だ其頃は多少でも良心といふものが有つたのですけれど。現時は既う全々以前とは人が違つたやうに成つて了ひました。それでも母親は自分の子の悪いのは思はず。世間や他人様を恨んで居ります』

『それが何んで無理でしやう。貴女も何卒姉さんを。女優といふ悪魔の手から。奪ひ帰すやうに仕て下さい。かうして御知り合に成つたのも。何にかの御縁ですから私も蔭乍らお力に成ります』

と松子はお小夜を慰さめたので

『難有たう存じます。御情を母親に伝へましたら。如何なに喜びましたやう』

とお小夜は嬉し相にいそ／＼して帰宅つて行つた。

× × × ×

其の翌日から竹子は稽古にも行かず。二三日ふさいで居たが。或る朝。未だ誰も起きぬうちに。早くも松子が庭へ出て。丹精して咲かした。朝顔の花を数へて居るのを見た竹子は。矢庭に駆け寄つて。

『姉さん。勘忍してね。既う我まゝは言はないから。女優に成ることは停めました。安心してね。父さんにも母さんにも。義兄さんにも謝罪つてね』

と取り纏つて泣いたので。  
『難有たう。よく思ひ停まつて呉たわねー』  
と姉も嬉し涙に暮た。(完)

### 注

(1) ただし、第52巻については個人蔵のため稿者未見。平成25年度國學院大學大学院特定課題研究報告書『『台湾愛国婦人』の研究』(研究代表者・上田正行、二〇一四・二)の目次に拠つた。

(2) 「在京記者」は記事中で治子に「太田さん」と呼ばれているが、人物の詳細については不明。平成25年度國學院大學大学院特定課題研究報告書『『台湾愛国婦人』の研究 本文翻刻篇』(注1に同じ)五四一頁に当記事全文が翻刻されている。

(3) この寄稿については上田正行「解題「台湾愛国婦人」という雑誌の意義」(平成25年度國學院大學大学院特定課題研究報告書『『台湾愛国婦人』の研究 本文翻刻篇』(注1に同じ)二〇

頁に既に指摘がある。

(4) 当雑誌の原稿料については与謝野晶子の言が参考になる。詳しくは拙稿「新資料『台湾愛国婦人』第六十一巻―与謝野晶子と雑誌の関わりを中心に―」(『日本研究』第27号、二〇一四・五)を参照。

(5) 山城屋せき「実務派のキャリアウーマンとして 国木田治子」(らいてう研究会編著『『青鞥』人物事典―一〇人の群像―』大修館書店、二〇〇一・五)、吉川豊子「国木田治子 解説」、菅井かをる「同 略年譜」(『新編 日本女性文学全集 第三巻』菁柿堂、二〇一・一)。

(6) 『読売新聞』一九一(明44)年九月二八日付朝刊に「●独歩未亡人の発奮△三越給仕女の監督」と題して「小供と一所に家に居ても仕方がありませんから何所か出たいと思つて田村江東様や田山花袋様にお話すると三越がよからうとのこと。田村様から日比様をお願いして二十四日から出ることにになりました」と治子の談話が記されている。「日比様」とは三越専務の日比翁助(一八六〇―一九三二)のことであり、日比の談話も同記事はあわせて掲載。『読売新聞』一九一二年(明45)六月三日付朝刊「新しい女(二六)△三越の給仕監督」と題する記事にも「国木田氏の未亡人はる子が、三越の店員になったのは、四十四年の九月であつた」とある(同記事はのち、X生『新らしき女』(聚精堂、一九一三(大2)・一)に収録)。

(7) 注3論文に同じ

(8) 塩田良平「国木田治子」(『新訂 明治女流作家論』文泉堂出

版、一九八三・一〇）三四六頁

- (9) 日清日露戦争報道に深く関わった独歩の妻である治子が愛国婦人会の趣旨を知らないとは想定しにくく、軍人への皮肉を含んだ一節は小説を書くなかで思わず流露してしまった真情か。或いは〈外地〉刊行の雑誌であるということが、そのような記述をゆるしたか。愛国婦人会台湾支部及び『台湾愛国婦人』は〈内地〉の愛国婦人会の趣旨を踏まえた上で、台湾総督府による山地制圧事業における後援と広告塔の役割を担っていた。この台湾支部独自の役割については、拙稿「雑誌『台湾愛国婦人』の史的位置―新資料・第六十巻を中心に―」（『日本研究』第22号、二〇〇九・五）、拙稿「雑誌『台湾愛国婦人』の性格―プロパガンダ、そして近代文学発生の場として―」（『県立広島大学人間文化学部紀要』第5号、二〇一〇・二）を参照。
- (10) 中島礼子「国木田治子論」（『国木田独歩―初期作品の世界―』明治書院、一九八八・八）三三一頁
- (11) 様々な職種の女性の実際生活を紹介した記事「夏に於ける女の生活振」（『女の世界』一九二五（大4）・八）の筆頭には「帝劇の女優 宇治龍子」の手記が掲げられている。（同記事は以下、「三越の女店員 国木田治子」「商店の女主人 相馬良子」「女タイピスト 多賀田しま子」の手記と続く）。メディアは女性の欲望と関心を諷める一方、同時にそれを刺激し喚起するものに他ならなかった。

- (12) 『読売新聞』一九二〇（大9）年五月三十一日付朝刊「国木田貞子葬儀」を参照。貞子が病弱であったことは『読売新聞』一九

一九（大8）年三月四日付朝刊「職業婦人 応接の間を監督して」、『読売新聞』一九二〇（大9）年一月四日付朝刊「明治座の茶屋の帳場へ 独歩婦人」からうかがえる。

- (13) 「松竹演劇の九十年」（『松竹九十年史』松竹株式会社、一九八五・一二）一〇七―一一一頁等を参照。

- (14) 帝劇史編纂委員会編「主要興業年譜」『帝劇の五十年』（東宝株式会社、一九六六・九）一〇二頁等を参照。

#### 付記

本稿はJSPS科研費JP17K02452の助成を受けた研究成果の一部である。

（しもおか ゆか、広島大学大学院文学研究科准教授）